

長野中央病院

だより

しなの
の
き



VOL.20

2020.8.1

■発行人／番場 誉 ■編集／長野中央病院広報委員会

特集1 外科

一人ひとりに寄り添うために
チームで支えるオーダーメイド医療を実現

特集2 感染対策室

「新型コロナウイルス感染症」
未知の感染対策に果敢に挑戦！

これからの暮らし





特
集
1
外科

一人ひとりに寄り添うために チームで支えるオーダーメイド医療を実現

がん疾患をはじめとするあらゆる外科疾患に対し
一貫して外科医師7人の機動力とチーム医療で挑む！

一般的に「外科」は手術によって疾患の治癒を目指します。当院では手術が必要な疾患として、特に「現在の日本において最も重大な疾患であるがん疾患」「そけいヘルニアなどの生活に直結した疾患」「急性虫垂炎や急性胆のう炎などの緊急対応すべき疾患」の治療に力を注いでいます。それぞれに疾患の種類や緊急性は異なりますが、「患者さん一人ひとりに寄り添った治療」を常に意識し、医療スタッフ全員で最善の治療を追求しています。

診断、手術治療、そして
最期までがん患者に寄り添う

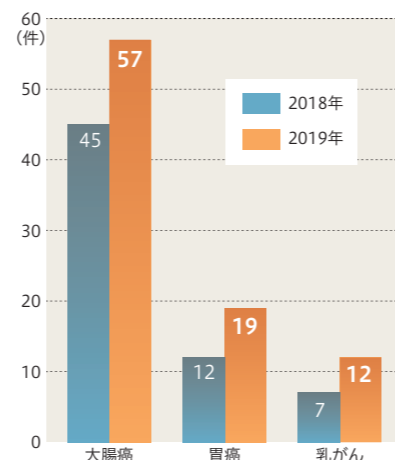
がんは日本人の死因第1位。10人のうち

3人が、がんで亡くなる時代です。治癒される方も多いのですが、一生のうちに2人に1人はがんになると言われています。

当院外科にも多くの患者さんが、がんの治療で来院されています。外科手術そのものはがん治療のプロセスのひとつでしかなく、患者さんとの関わりは、術前から術後まで長期間にわたり続きます。がんのステージによっては、抗がん剤や放射線などの治療も合わせ、医師をはじめ各医療スタッフと連携し、患者さんに最も適した治療を模索し続けます。例えば消化器であれば術後5年間、乳がんであれば術後10年間。再発も含め、患者さんの状態をきめ細かく診ていきます。

また状況によっては必要な緩和ケアもしっかりと行いながら、最期まで患者さんに親身に寄り添う継続的な診療を行っています。

◆当院の手術の増加



早期発見がカギ がんは克服できる病

以前ほどがんを怖がる必要はありません。医療が進歩した現代において、がんは早期に発見できれば、より高い確率で根治を目指すようになりました。早期発見こそががん克服のカギとなります。

当院では、がんの早期発見を目指して積極的に大腸がん検診と乳がん検診に取り組んでいます。

まず、大腸がん検診。大腸がんが年々増えている中、検便による便潜血反応検査が早期発見に役立っています。便に血が混じっているかどうかを調べると、100人のうち約10人に陽性反応があります。さらに精密検査を行うと、そのうち3～5人に大腸がんが発見されます。大腸がんの多くはこの検診によってみつかっています。大腸がんは、女性のがんによる死因の第1位。自覚症状が出る前にかんを発見するためにも、定期的に検診を受けていただきたいと思えます。

次に、乳がん検診。乳がんは女性がかん奪るがんの第1位となっており、やはり早期発見が大きなカギを握っています。

当院ではマンモグラフィーと乳腺超音波検査の両検査を駆使し、より確実な診断を行おうと考えています。

乳がんは患者さんのケアも大切です。当院には「たんぼぼの会」という患者会があり、医療スタッフと共に乳がん患者さんを支えています。

そけいヘルニアを我慢しない より充実した日々のために

生命に関わるほどではないが、手術をしなければ治癒できない疾患があります。例えば「そけいヘルニア」です。「そけい（鼠径）」とは、足のつけねの部分のことをいい、「ヘルニア」とは、体の組織が正しい位置からはみ出した状態をいいます。昔は「脱腸」と呼ばれていました。昼間、起きて動くときは突出と違和感があるのに、横になりお腹の力を抜くと突出が消失するため、病院に行くほどではないと我慢してしまう方もいますが、より良い活動的な生活を送るためにも治療をお勧めしています。当院のそけいヘルニア手術数は、ここ10年来、一定していますが、近年は特に高齢の患者さんが増えています。

患者さんは高齢になるほど、合併症

を抱えることが多くなります。従って、それぞれの合併症治療をきちんと把握した上で、外科治療に臨む必要があります。例えば、高血圧・心臓病の患者さんは、降圧剤や抗凝固剤の内服の調整が不可欠です。糖尿病の方は、血糖値の精密なコントロールが重要になります。また高齢者に対しては、全身麻酔の使用についても慎重になります。

このため当院の外科では、内科や麻酔科と緊密な連携を実現させ、より安全な手術を提供するために、一人ひとりに合ったオーダーメイドの医療を提供しています。

待ってられない急性疾患に対応 1時間で手術をスタート

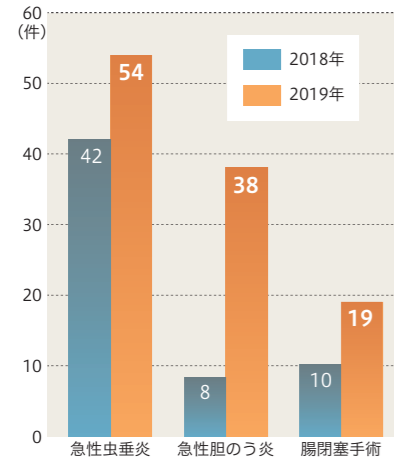
急性の疾患や緊急対応すべき疾患に対しては、7人の外科医師を中心とした機動力で対応しています。主な急性疾患である急性虫垂炎、急性胆のう炎、腸閉塞症は、手術数が年々増加しています。ことに激増している急性胆のう炎に対する手術治療は各施設の考え方や対応できる能力の違いがあるため、緊急手術を可能にする体制づくりが今後ますます重要になると感じています。



(前列左から) 救急部部長 成田 壮一 医師 外科部長 成田 淳 医師 副院長 弾塚 孝雄 医師 和城 光庸 医師
(後列左から) 北原 拓哉 医師 柳沢 信生 医師 後藤 諒 医師

当院では患者さんが救急車で運ばれて手術が必要な疾患が判明すると、1時間で外科医、麻酔科医、看護師などの外科チームが集まり、すぐに手術を始めることができます。フットワークの良さと機動力で、さらに充実した医療体制を地域に提供していきたいと思ひます。

◆ 当院の救急対応手術の増加



患者さんの治療の全貌を医療スタッフ全員で共有

外科の医療スタッフは、毎週月曜日の午後にふたつの「カンファレンス（医療ミーティング）」を開催しています。術前カンファレンスでは、その週の患者さんの手術内容を中心に、綿密な打ち合わせが行われます。全外科医、



マンモグラフィーによる乳房検診は、乳がんの早期発見につながる重要な検査です。診療放射線技師が丁寧に対応します。乳がん検診をぜひ受けましょう。

関係病棟（外科・HCU・ICU）・外来・手術室の看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師が参加します。

続けて開かれる病棟カンファレンスでは、入院患者さんについて現状および生活背景を含めたさまざまな問題を話し合います。こちらでは全外科医、外科病棟看護師、薬剤師、管理栄養士、リハビリスタッフ、医療ソーシャルワーカー、退院支援センターのスタッフが参加して行われます。どちらのカンファレンスも、参加者全員がプロとしての自覚を持ち、専門性を発揮することで、患者さんにとって最善の治療をチームとして選択していきます。

さらに翌火曜日には、多職種による

外科病棟チームの回診を行っています。ベッドサイドで入院中の過ごし方や退院後の課題などを患者さんとともに話し合うことによって、医療スタッフ全員が情報をリアルタイムで共有できるようになりました。常に退院後の生活を見据えて課題を事前に解決し、患者さんが安心して退院することができるよう、医療スタッフ全員が治療+αに取り組んでいます。

患者さんを第一に考え、チームで医療を実践する当院の姿勢は、外科においても一貫しています。



患者さんとともに歩こう

リレー・フォー・ライフ・ジャパン信州長野

がん患者は24時間365日戦い続けています。アメリカ発祥のこのイベントでは、がん患者さん＝サバイバーと、支える人＝ケアギバーと一緒にリレー方式で24時間歩き続け、「祝う」「しのぶ」そして「立ち向かう」という思いを共有します。当院も黄色をテーマカラーに、「たんぼばの会」という乳がん患者会とともにアクティブに参加しています。また長野の地で立ち上がった、「リレー・フォー・ライフ・ジャパン信州長野」の運営にも携わっています。

外科部長、
南長池診療所長
なりた じゅん 医師
成田 淳



チーム医療の現場からメッセージ



手術室看護師より

全身麻酔下で手術を受ける患者さんには術前訪問を行い、患者さんやご家族の手術に対する思いを聞き、その気持ちに寄り添い、少しでも安心した状態で手術に臨めるよう取り組んでいます。また手術後、状態の安定した患者さんに術後訪問を行い、術後の思いを伺うことで術前からの振り返りも大切にしています。

リハビリスタッフより

外科の患者さんは傷の痛みがあり、今後の生活に不安を抱えている方が多いため、しっかりとお話を聞きながら元の生活が送れるよう支援しています。患者さんが元気に退院される姿を励みに、多職種と共に患者さんを支えています。

管理栄養士より

手術後は食欲が進まないこともたびたびあります。患者さんの食事に対する気持ちを多職種で共有し、嗜好を取り入れて口から食べる支援をしています。また、退院後の食事に不安のある方もおられるため、安心して生活出来るよう、栄養相談を行っています。



チーム医療を重視する当院では、毎週決まった日時にカンファレンス（医療ミーティング）を行っています。予定している手術や入院されている患者さんの状態について、各スタッフが情報を共有していきます。

化学療法室看護師より

外来化学療法室には「がん」と診断を受けて不安を抱えた患者さんが来られるため、患者さんが感じていることを表現しやすいように細かくお話を伺うようにしています。また必要に応じて多職種と連携を取り、患者さんの不安を解消できるよう取り組んでいます。

医療ソーシャルワーカーより

治療後に体が思うように動かず、退院後の生活に不安を抱えている患者さんは少なくありません。問題を整理して課題を明確にすることで介護保険サービスの利用等につなげ、退院後も安心して療養ができるよう相談に乗っています。医療費や、療養場所の相談などにも柔軟に対応しています。

病棟看護師より

外科は毎日のように予約や緊急で手術をしています。同じ手術でも患者さんの年齢や理解度、環境に合わせた医療を提供しています。そのため、術前カンファレンス、病棟カンファレンス、回診など、多職種と共に実施できるチームワークを大事にしています。

特集
2 感染対策室



感染対策室による、
防護具装着方法のレクチャー

「新型コロナウイルス感染症」 未知の感染対策に果敢に挑戦！

3ヶ月間、連日開催された 新型コロナウイルス対策会議

新型コロナウイルス感染症に対して
当院では、感染対策室のスタッフ2人が
院内における指導的な役割を担い、病
院全体が一丸となって対策に取り組み
ました。

当院の新型コロナウイルス感染症への
対応は、1月17日、海外旅行者・帰
国者に向けて「受診時のお願い」を正
面玄関に掲示することから始まりまし
た。これは、日本で初めて感染者が発
表された翌日のことです。感染対策室
では未知のウイルスへの警戒感を強め、
次々に感染症への対応を具体化してい
きました。国内での感染者
が徐々に増えていく中、2月
25日に全病棟の面会禁止に
踏み切り、2日後の27日に第
1回新型コロナウイルス対策
会議を開催。感染症の情報
や対策を話し合うこの会議
は、以降、全国の緊急事態
宣言が解除される5月25日
まで連日開催されていました。
なお、現在は週2回の開催と
し、第二波に対し迅速に動
けるよう備えています。

感染管理認定看護師ネットワーク を生かした、“長野中央病院モデル”

新型コロナウイルス感染症について
「当初は、ウイルスの性質がまったくわ
からず手探り状態でしたが、とにかく
安全確保を大前提として対応を指示し
ました」と小林師長は当時を振り返り
ます。

その後、時間の経過とともに保健所
や県、医師会、感染症学会からも情
報が随時入ってくるようになりました。
加えて有益な情報は、全国各地で働



(左) 感染対策室 師長
感染管理認定看護師
小林 史博
(右) 感染管理認定看護師
宮川 佳也

く感染症管理認定看護師から、現場の
声として届きました。感染対策室のス
タッフが常にアンテナを高くして最新
の情報を入手したことで、当院の対応
は、“長野中央病院モデル”として現場
に即した実行可能なものに仕上がった
と考えています。



現在は、入館されるすべての方に体
調や移動歴をお伺いし、問題がなくと
も検温をお願いしています。また、発
熱や咳などの呼吸器症状のある方は屋
外のテントで看護師による問診を行う
など、院内にウイルスを持ち込まない
ように工夫しています。

職員全員が感染対策について高い意
識を持ち、より安心安全な医療の提供
に取り組んでいます。

多くの方に支えられて

「新型コロナウイルス感染症対策の対
応は頻繁に更新されていましたが、ス
タッフは誰一人として文句も言わずに
対応してくれて、本当に感謝していま
す。また、番場院長を始めとする管理
部に感染対策への深い理解があったこ
とも、対策を推進する立場として大変
有難かったです」と話すのは宮川看護
師。小林師長も、「院内のスタッフはも
とより、院外の方々の協力にも心から
感謝しています。地域の方から手作り
マスクをいただいたり、企業から支援
いただいたり。長野市役所の医療従事



者に向けたライトアップメッセージも
本当に嬉しく感じました。そして、働
いている職員を見守ってくれる家族の
皆さん。すべての人たちの協力があっ
たからこそ、私たちは頑張れたのだと
思います」と感謝の思いを語ります。

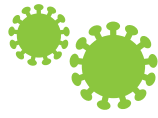
新しい生活様式を大切に

今、長野市の新型コロナウイルスは
小康状態を保っていますが、東京での
感染者数を鑑みるに、まだまだ油断は
できない状況です。

「新型コロナウイルス感染症の第一
波では、未経験のウイルスに対応する
ために様々な対策を展開しました。今
後は更なる感染拡大にも対応できる体
制にしておきたいと考えています。自
分も含めて地域の皆さんには、常に新
型コロナウイルスに感染する可能性が
あることを念頭に置いて、新しい生活
様式を守っていただきたいと思いま
す」と、宮川看護師は呼びかけます。一人
ひとりが、そして地域全体が意識を持
つことで、新型コロナウイルスの感染
を防ぎましょう。（取材日/6月24日）

新型コロナウイルス感染症への感染防止に協力していただいた個人や
地域の方々、また行政や多くの企業から物資の提供や温かいメッセー
ジに感謝の思いを込め6月9日～15日、病院建物正面をブルーでライ
トアップしました。また、職員によるメッセージ画像を制作し当院の
ホームページに掲載しました。





これからの暮らし

毎日の暮らしの中で気をつけること

新型コロナウイルスは、今も世界中で猛威を振るっている感染症です。このウイルスの大きな特徴は「特徴的な症状がない」こと。主な症状として、発熱や咳、鼻水といった風邪のような症状から、重症になると肺炎を患うこともあります。さらに感染しても無症状の場合もあり、確定診断が難しいことが感染を拡大させる大きな要因となっています。

新型コロナウイルスはPCR検査や抗体検査、抗原検査など様々な検査方法が提案されていますが、どれも一長一短であり完璧な検査方法はありません。そのため検査結果は陰性でも、実際には感染していたというケースも珍しくありません。誰が新型コロナウイルスに感染していてもおかしくない状況になっています。

そこで厚生労働省は「新しい生活様式」を提言し、実践を国民に呼び掛けています。長野中央病院でもこの新しい生活様式に基づき、利用者の皆様には普段から生活に気を付けていただくようお願いしていきます。

手洗い、手や指の消毒を習慣にしましょう



マスクを着用し、咳エチケットを徹底しましょう



こまめに換気をしましょう



3密を回避しましょう



毎日体温測定・健康観察を行いましょう



自身や相手を新型コロナウイルスから守る心構えが、新型コロナウイルスの早期終息につながります。今後とも皆様のご協力よろしくお願いします。

体調管理チェックリストはこちらから→



●受診する前に

発熱や倦怠感などの症状や新型コロナウイルス感染症ではないかと不安な方は、医療機関を受診する前に、必ずお住まいの地域にある保健所にご相談ください。

長野市保健所

平日(8:30~17:15)
☎026-226-9964
休日・夜間(17:15~8:30)
☎026-226-4911

長野保健福祉事務所

(長野保健所)
☎026-225-9039
(24時間対応)

北信保健福祉事務所

(北信保健所)
☎0269-62-6104
(24時間対応)

●入院患者さんへのお見舞いは

状況に応じて変わりますので、ホームページにてご確認をお願いいたします。

長野医療生活協同組合 長野中央病院
<https://www.nagano-chuo-hospital.jp/>



地域の診療所・医院・クリニックへの紹介を勧めています

当院では、待ち時間の緩和や、救急医療・専門医療機関としての役割を発揮するために、症状の安定している患者さんを、開業医の先生に紹介・転院することを勧めています。

開業医の先生方には「かかりつけ医」として患者さんの日常的な治療と管理をしていただき、専門医師の診断や検査が必要な場合は、当院で受診いただけるよう連携をしています。

急病時には、いつでも当院を受診いただけますので、ご理解・ご協力の程よろしくお願いいたします。



長野医療生活協同組合

長野中央病院

〒380-0814 長野市西鶴賀町 1570
TEL.026-234-3211 FAX.026-234-1493
<https://www.nagano-chuo-hospital.jp/>

